

# 保育現場と学問の交流の中で

——一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中で ——

長山 篤子



一九九六年第四十九回日本保育学会で企画されましたシンポジウム「保育学の現在と未来」に於て、私は保育現場にいる者として細やかな提言をいたしました。提言した内容の一つとして、一九七八年に実施されておりましたお茶の水女子大学児童学科、津守真先生・本田和子先生・大戸美也子先生を中心

とした現職研究会が果たした役割とその意味について述べました。現職研究会で行われた保育実践研究が、保育者にとって大変有意義であった旨の内容でした。その内容がどのように学問体系に組み込まれ位置づけられたかといった観点では意見を述べることはできませんでしたが、少なくとも、保育者に将

来に向かつて保育に示唆を与えるものであったという事は確かであったと述べました。それは、この研究会で、子どもに向き合う時の多くの判断力が与えられましたし、保育の内容を検討する知恵があたえられたからでした。従って保育の質を高めていく上で意味があり保育実践研究が保育学に果す役割の先駆的な方向を示したと当時を振り返って省察し、これからの保育学を考える上での一つの提言として述べた次第です。

保育学会のシンポジウムでは、時間の制限がありましたので現職研究会で行われた保育実践研究がどのようなものであったかその内容に触れることが出来ませんでした。その後、この研究会に関心を持たれた方の要請もあり、改めて古い資料を掘り起こし、その一部を本誌の紙面に数回に分けて紹介することになりました。本格的な資料は、お茶の水女子大学児童学科研究室に残されていることと思いま

すので、私のレポートを中心に、当時学んだ事を紹介したいと思います。

この研究会のメンバーは、先に記した大学の先生方、研究室に所属していらしたスタッフ及び、幼稚園八園の代表保育者によって構成されました。そして八園の幼稚園にメンバーが一月に一度参観に行きレポートをし、そのレポートを持ち寄って研究会が持たれることになっていました。そこで検討された内容をそれぞれの幼稚園に持ち帰り、更に園内で研修会をし、保育に生かすといった方法で保育実践研究が進められました。

当時私はH幼稚園に週四日関わっておりましたので、その園を代表して、研究生としての手続きをし、この研究会のメンバーになりました。当時のレポートを紹介し、研究会で討議された内容、及びそれがどのように保育現場で用いられたかご紹介してみたいと思います。

M 幼稚園参観レポート……一月二十二日(火)

半日をM幼稚園で過ごし、とても気持ちのよい安定感を持つことが出来た。子どもが遊んでいる状態を記録するより、この園の落着いた雰囲気はどこに潜んでいるのだろうか、その事についていくつかの事を考えてみた。

絵について

園の壁のどこどこに専門家が描いたと思われる、おおきな絵や小さな絵が飾られている。どの絵もその場の雰囲気非常にマッチしており、この園に絵を描く人が生活していることを感じさせられた。そこで子どもの絵に関心を持ち観察をする。三歳女児がクレヨンで画用紙に絵を描いている。

M Nちゃんこんどはどの色がいいの……  
N これ

二人で会話して描いている絵は、自然で楽し気なものである。先生がのぞきにくる。楽しんで描いている様子がわかる。五歳男児がポスターカラーで絵を描いている。

一色描いては距離を置きながら、次の色を選んでいる。自分の描いたものを満足気にながめている。

五歳女児二名がクレヨンで絵を描いている。きりんを中心に描き、会話を楽しみながらそのきわにいろいろなものを描いていく。ゆっくり描き満足気です楽しそうであった。

園の色々な所に大人の絵、子どもの絵が飾られ、色々な所で子どもがゆっくりと絵を描いている。どの子どもも描く事を楽しみ、心を満たしているようであった。



## 織機について

ままごとコーナーの横に織機がある。糸巻きも一緒に置かれていた。羊毛やそれを剥ぐ道具も置かれている。コーナーの向う側は出窓になっており、冬の室内花が沢山並べられてある。それだけで温かな家庭の雰囲気は満ちていた。どこの幼稚園にも見られるといった光景ではなく、ここだけで見られる光景に受けとめられた。絵と同じようにここの幼稚園の生活、文化を感じさせられるものであった。

## 子どもの姿から

私が所属している幼稚園の子どもの姿と、どうしても比較して見てしまう。私は毎日、子どもと出会い楽しかったり苦労したり、時には、「どうしてこんなに混乱するのだろう」と考え込んでしまう出会いを子どもたちとしている。M幼稚園でも時にはそのような日があるのかもしれないが、少なくとも今日は、子どもたちが「いらいら」している様子には

出会わなかった。年長のクラスで保育者が、『くしゃみくしゃみくしゃみ天のめぐみ』（福音館）を読み聞かせている場合においても、三十五名の子どもたちが「聞く」ことにあまり集中していたので驚いた。少し気になるところでもあった。

以上が私のレポートの概要ですが他に二園の先生方の感想のレポートの一部を紹介します。

## Y幼稚園の先生の感想

砂遊びの様子を見る事が出来た。長い時間、ゆったりと砂に関わっていた。保育者もずうっとその場と一緒にいる。保育者は砂遊びの遊具の整理を一緒にしたり、子どもの様子をじっと眺めたり、ことばをかけたたり、落ち着いた雰囲気であった。人も物も良く揃っていると言う印象を受けた。

## A幼稚園の先生の感想

保育者が子どもの遊びにあまり介入しないのが印

象的であった。

子どもが作ったものが丁寧に保存されていた。

一つの遊びが長く続いている。積木の一角にカウ  
ンターのある花やさんが出来た。貯金通帳まで出来  
ていた。外に出て色々な材料を集めてくる。花やさ  
んに必要な材料が外に色々あった。

\*

以上大変大まかなレポートの概要を紹介しました  
が、他にも何園かの先生方のレポートがありました  
。それらを持ちより二月に、ゼミを行っておりま  
す。そこでの先生方の発言をご紹介したいと思いま  
す。

大戸先生 幼稚園では、一日の中、一か月の中、一  
年の中、いろいろなことがあるが、長い期間の中  
で、それらのことが繰り返し繰り返し出てくる。そ  
れがM幼稚園の特長ではないだろうか。

A 幼稚園の先生 M 幼稚園の子

どもたちは、家庭で行う遊びと  
幼稚園で行う遊びが、異なって  
いるのではないかと思った。遊  
びに大きなもり上りはなくたん  
たと続いている。

O 幼稚園の先生 安心感がただ

よっている。やや物足りない感じがある。その原因  
を皆で考え合ってみると面白い。

S 幼稚園の先生 どこか違ったものを感じる。子ど  
もたち同志の規制があるが無意識に行われているよ  
うに思う。

H 幼稚園の先生 そこに住んでいる人の思想が感じ  
られる。

N 幼稚園の先生 びっくりするような活動が見られ  
ない。

本田先生 これまで出会ったことのない幼稚園であ



る。M幼稚園の文化を持っている。

この家の家風と言うか、芸術家の姉妹が住んでいるからであろう。子どもたちも影響されてこの家に入りこんできたと言う印象を受ける。五歳のお花やさんごっこも「花を集める」「並べる」の繰り返しが目白。

津守先生 とてもきれいなみがかれた床が印象的である。他の幼稚園にはないような遊具が目立つ。教育主張を特に持つと言うのではなく、生活の中に子どもが入り込んでいる。これはやろうと思って出来ることではない。とてもユニークである。

\*

以上のようなことが、M幼稚園の先生を交えて話し合われました。M幼稚園のO先生は、このようなゼミを通して、多くの新しい事実気づいた旨を話されています。そして、自分達のこの一年の保育を

振り返って「花やさん」「お家ごっこ」がどのように行われてきたかを話されました。M幼稚園の経営者が、芸術家の姉妹であり二人がいつも子どもたちの中で、一緒に生活している様子も伺いました。

ここでのゼミをその後どのようにまとめて保育実践研究の資料にしていったか、ご紹介出来ませんが、このゼミに加わっている保育者、研究者は、それぞれに多くの学びをする事が出来ました。特に環境や雰囲気、子どもの生活に及ぼす影響について改めて学ぶ事が出来ました。ゼミに参加した保育者は各自の園にこの資料を持ち帰り園内研修の資料にしました。それぞれの幼稚園の保育に具体的な影響を与えました。大学の先生方もそれぞれのご研究の良い資料として用いられたと思います。こうしたゼミの繰り返しは、保育そのものの質を変化させていく事が出来たと確信しております。

(青山学院幼稚園)